

「立ち上がる農山漁村」選定案概要書

取 組 分 野：【食】、【バイオマス】

1. 都道府県、市町村 福島県いわき市
2. 事業者名 (有)とまとランドいわき
3. 取組みの名称 環境保護と地域活性化を第一に考えた農業多角経営
4. 取組概要等

概 要

平成13年10月に有限会社とまとランドいわき設立。平成15年に施設園芸の最先端であるオランダの技術を導入し、有害物質を温室外に排出しない循環式養液栽培温室を建設。同年から栽培及び活動を開始し、現在3期目となる（トマト栽培約2.3ha、いちじく栽培約1.5ha）。

循環式養液栽培は土を一切使わないため、最盛期には1日に100t近くの水を必要とする。そのため、雨水貯水タンク(800t×2基)を設置、また地域の良質な地下水を利用し、雨水と混合して使用する。また、トマトに吸収されずに残った排液は、従来の養液栽培では地下浸透、もしくは排水溝へ全量流さざる得なかったが、ろ過・殺菌行程を踏むことで、ほぼ養液として再利用可能となっている。

年1作の長期栽培であるために、暖房燃料についても環境に配慮している。一般的には重油が用いられているが、燃焼時に硫黄分や有害物質が排出することから、クリーンエネルギーであるLPGを使用している。LPGは環境に与える影響が少なく、また、LPG燃焼時に出る二酸化炭素を、ハウス内に施用し、作物の光合成促進のために利用しているため大気中への放出は無い。

2.3ヘクタールのガラス温室による年間を通したトマトの長期栽培という強みを生かし地域の主婦を常時26名、地域の高齢者を臨時(最盛期10名ほど)で雇用している。また、コンピュータで温度・湿度・灌水量などを自動制御できる温室であるために、従来の農業のように朝早く起きて暗くなるまで仕事をする必要もなく、屋外とは隔離され、常に衛生的で従来の農業にイメージとして持たれていた3K作業も少なく、女性や高齢者でも非常に働きやすい環境となっている。

温室内の一面を使った直売所では年間を通してトマトや花などを販売しており、多いときで約500人/日の来客があり年間約6,000万円の売上げとなる。もともと観光地ではなく農地中心の地域であったために、これだけの人を呼べるようになっただけでも大きな成果であると実感している。

活動の規模

項目	H13	H14	H15	H16	H17
生産量			714	710	735
解説	単位：t 主にトマト、温室稼働から2年続けて10a当り36tを達成				
売り上げ			230,000	250,000	270,000
解説	単位：千円 主に市場出荷売上げ、直売所売り上げ				
来客数			200人/日	300人/日	300人/日
解説	一日あたりの平均来客数(直売のみ)				
イベント回数			0	2	3
解説	10月11周年感謝イベント(1日) GW1収穫体験イベント				
イベント参加者				3,600	4,300
解説	1回目(10月):1,300人 2回目(GW):2,300人				

活用している地域資源

年間の日照時間が全国的にもトップクラスという福島県いわき市の気候特色を活かし、その環境条件にあった栽培品目・施設・方法を行っており、年間収穫量は国内でも最高の結果を上げることができている。また、地域のやる気のある方々を雇用し、常にお客様の立場に立った経営・サービスを行っている。

地域活性化のポイント

今まで集客のできる施設が無かった地域に人を呼べる施設ができ、多くの人が集まるようになった。周囲の人間がそれを見て地域活性化の意欲が湧いてきている。第2期から栽培を開始したいちじくについて、地域の高齢者に栽培を依頼しており、「(有)とまとランドいわき」が主体となり、高齢者達で構成する「長友いちじく生産組合」を設立。いちじくの産地化を目指し日々作業を行っている。初収穫を迎えたイチジクを直売所の店頭にて試食販売を行い、生食以外の食べ方があまり知られていないいちじくの加工を提案した。

地域に密着した経営を理念としているので、どんな事業を始めるにしても、まず地域の方々に説明すると率先して協力が得られる。こうした傾向そのものが地域の活性化になっている。

事業の今後の展開方向

敷地内に72㎡の直売所を建設し、栽培している作物だけでなく、地域農家にスペースを提供して栽培した作物をインショップ形式で販売してもらっている。今後、さらに生産者の数を増やし育成までも視野にilleていく。また、現在代表取締役の個人事業である水稻の栽培についても会社事業化し、直売所近くの田を利用したアイガモ農法を行う計画があり、今期から取得した特別栽培米の認証、エコファーマーの認定と併せて付加価値を付けていく。

また、現状では年1回のトマト植替え時には販売する物が無いために直売所を閉鎖していたが、今後は来期作付け予定でいるブルーベリーの観光農園化や別の作物を販売などで年間を通して人の集まる施設・地域にしていく。

環境面でも現在一部リサイクルできない排液中に含まれる有害物質である「硝酸態チッソ」を、微生物の力を利用して除去する方法を福島県農業試験場いわき支場と協力して試験を行っている。この試験を成功させ、完全閉鎖型農業の実現を進めていく。

また、化学農薬に頼った栽培ではなく微生物の力を利用した農薬（BT剤）や各種害虫の天敵・忌避剤を利用し、より安心・安全な農作物の栽培を継続していく。

